

低コスト手順確立へ

アスベスト処理

健康被害が社会的問題となっているアスベスト(石綿)について、東北大多元物質科学研究所などは二十四日、山形県最上町の産廃処理施設で、安全かつ低コストで処理するためのマニュアル作成に向けた共同実験を始めた。葛西栄輝同研究所教授(環境工学)は「現在、的確な処理手順がなく、処理施設側の経験頼み。実験を通じ汎用性の高い手順を整備したい」としている。

山砂混ぜ低温溶融

東北大などと共同実験開始

山形・最上



実験を行うのは同研究所と産廃処理施設「最上クリーンセンター」(阿部良春所長)、最上環境化学研究所(後藤広所長)の共同研究チーム。実験は、アスベストを含む廃棄物を溶融炉で処理する際、入手が容易な山砂や粘土などを混ぜることで、一三八〇度で溶けることを主に実証する。この手法が確立されれば、現在必要とされる「一六〇〇度以上」とい

山形県最上町の産廃処理施設で、アスベスト処理のマニュアル作りに向けた実験を進める研究チームメンバーら

設で、安全かつ低コストで処理するためのマニュアル作成に向けた共同実験を始めた。葛西栄輝同研究所教授(環境工学)は「現在、的確な処理手順がなく、処理施設側の経験頼み。実験を通じ汎用性の高い手順を整備したい」としている。

環境省の産廃物処理等研究費補助事業に採択されており、研究は二〇〇八年度まで行われる。将来的には、各施設に持ち込まれるアスベスト廃棄物について、簡単な溶融試験を行うだけで山砂などの混入割合を計算できるマニュアルの作成を目指す。

処理後のアスベストは、「溶融スラグ」と呼ばれる黒色で無害なガラス状物質に変わり、舗装工事などに再利用することができるとい

葛西教授は「アスベスト廃棄物は今後三十年で年間百万トンの排出が予測されている。マニュアルを作ることで通常の産廃物焼却灰の溶融炉

とうほく総合

でも処理できるように、再資源化を促進できるように研究を急ぎたい」と話している。